

原爆の落ちた日（談）

宮川 愛子

中野四丁目

原爆が落とされた時は、広島市下柳町に妹と二人で住んでいました。その時二四歳でした。妹が二二歳でしたからね。

それでは、原爆の当日の模様を中心に話しましょう。

その当時、田舎からおじさんが野菜を積んできて、帰りはアパートの肥やしを持って帰るようなことをしていました。毎日ではなく、週に何回かですがね。その日も、ちょうどおじさんが来て、野菜とじゃがいもを酢と取り替えてくれと言って、私が酢を持って来たとき、ガラガラッともものすごい音がして家が揺れ、火花がパッパッと飛んできました。アパートの玄関は共同炊事場だったので、とっさに台所の下に隠れるのがいいと思っておじさんと一緒に隠れたんです。

そしたら、夕立の時のように空が真っ黒になってね、火花がパッパッパッと散って、どこかに爆弾が落ちたなと思ったんです。家が壊れて人が血だらけになっていてね、アパートの人達が出て来ました。私もそうなっていたらと思うんです。妹が奥の部屋にいたもんだから、名前を呼んだんです。だけどい

ないんです。てっきり家の下敷きになっちゃっているのかなと思ったりしました。アパートは焼けていて、少し傾いていました。それでも名前を呼んだんです。ひよつと洋服ダンスのあった所を見たら、大きな穴があいているんです。どうしたものかと心配でした。

家のすぐ近くに川があるんですよ。外で人の声がして、「川のほうへ逃げた方がいいぞ」と言うもんだから、近くにあった防空頭巾を拾って川へ行ってみたら、妹がそこにいたのでホッとしました。アパートの人達もみんないました。その時、着ていた夏の服はボロボロになっていました。空は特に見なかったけど、遠くの人に後で聞いたら、大きな音ときこの雲を見たと言っていました。川までは歩いて十分位だったけど、川は大勢の人でした。火の海でしたよ。川の両側は火の滝のようですね、家がポッポポッと燃えてね。

川に行く途中、小さな子供が道路で遊んでいるんですよ。三歳位の男の子ですね。ニコニコ笑ってかわいい子でした。かわい

そうだから連れて行こうと思ったんですがね。どうしたでしょうか。

怪我をした人達が「兵隊さん、助けてください」って叫んでいるんです。姿は見えないんです。声だけ。家の下敷きになった人の声なんです。

川に着いたら大勢の人がいてね。いつもの川は水がたくさんあるんですが、その日の八時十五分でしたかね、原爆が落ちたのは。そのせいかどうか分からないんですが、川の真ん中だけに水がたまっていました。土が見えている所には、大勢の人がいました。私もそこへ行ったんだけどね、そこに居た兵隊さんだったか、全身やけどを負っていて、「天皇陛下万歳」って言うんですね。兵隊は皆死ぬ時はそう言って死ぬような訓練を受けていたのでしょうかね。

それからは、川にボートがたくさんあったから、みんな乗り込んだんです。私もボートに乗り込んだのね。そこらにあった、切れっぱしや手で漕いでね。その手はやけどで、皮膚がとろろこぶのようにぶら下がって、おぼけのようですね。私や妹はならなかったけど。

やけどの人たちは「熱いよー、熱いよー」って泣きよるのね。それでも薬はなにも無いんです。

ボートで下流の橋の下へ行きました。また爆弾が落ちるんじゃないかといってね。後で聞いたら、みんな川の兩岸で寝たみ

たいですね。

その後、みんながボートに乗り込もうとして、沈みそうになったから川岸に上がったのね。そしたら、今度は飛行機がブーンと低く飛んで来て、B29じゃなくてグラマンか何かね。こうもりのような、カレイの大きなような感じのでした。原爆の威力を偵察に来たのでしょうかね。地上からは乗ってる人が見える位でしたよ。

それからね、雨が降ったの。真つ黒な雨でしたよ。大粒の。そう長くは続かなかったけれどね。そして、昼頃になって、火脹れになった人が川の兩岸に一尺おき位にいましたよ。もう死んだ人もいましたね。中には「痛い、痛い」「兵隊さん」と、助けを求めている人もいましたよ。そのうち、だんだん日が暮れてきました。水だけはあったんですよ。外の水道管は爆弾でやられてね。ピッピピッピと水が吹きよる。

それから、アパートの方へ行ってみようかと思ってね、行ってみただけで勿論アパートは焼け落ちていてね、家もみんな焼けてしまっただけで、焼け野原になっていました。小高い山があったんですが、そこからは市内一面見渡せましたね。

犬や猫や人がたくさん死んでいましたね。大きなおなかの人が全身まっ黄色になって、血を吐いて死んでいました。あれにはびっくりしましたね。でも、後になって慣れて平気でしたよ。黒焦げの人や犬猫は、みんな血を吐いて死んでいましたよ。

衣服は溶けてしまつて殆ど裸でしたね。焼けてしまつてね。

夕方になつたから、土手の方に集合したのね。川岸のそばは別荘地でね、いい家があつたんですよ。でもみんな焼けてしまつてね。岸辺ではお産をした人もいましたよ。被曝した直後だつたからか、翌日に母子とも死んでしまいましたね。

私のそばにいた小さい男の子が「おばちゃん、熱いよー、痛いよー」つて言うのね。顔は火脹れていてね。「水が飲みたい」と言うの。絶対飲ませたらいかんと思つて「飲んだら死ぬらしいよ」と言つたけど、「死んでもいいから水が飲みたい。水が飲みたい」と言うの。もう助からないと思つたから、汲んで飲ませてやりました。案の定、翌朝「おばちゃん、ありがとう」と言つて死んでしまいました。結局、その日は川岸で一晩夜を明かしました。夜は町が焼けるのを見ていました。

その日は水だけでしのぎましたが、二、三日して炊き出しがありました。おにぎりをトラックで運んでくれてね。水は結構飲んでいたね。私は運良く、殆どやけども負わず人の世話もできただけで、怪我ややけどを受けた人は、翌朝死んでいきました。生きていた人の手当は、薬がないからアカチンだけ塗つていたようです。今でいえばマキキユロですね。

妹と八丁堀へ行くとき、電車は動いていないんです。電車に乗つていて死んだ人が大勢いたようです。

妹は八丁堀のデパートにいたのですが、後で聞いた話では、

遠くから来る人はデパートの地下に入ったんだそうですよ。鎧

戸が閉まつていて、みんな蒸し焼きになつて死んだようですよ。地下が安全だと思つて地下や防空壕に入った人は、皆死んだようですよ。熱気ですよ。私は川に行つたので助かりました。

アパートの他の人達は、原爆で直接死んだ人はいなくなつたようです。でも、ある人は頭が狂つて、火の中に入つて死んだようですよ。家の下敷きになつて死んだ人もおるよね。アパートには三人兄弟が住んでいてね、戦局が厳しくなつた上海から帰つてきた上の姉は「帰国してよかつた」と言つていたのに、家の下敷きになつて死にました。妹に「早く弟を連れて逃げろ」と言つてね。後で聞いたことだけれど、爆弾の毒ガスを吸つて死んだ人も随分いたようです。

原爆を受けたけど、今の体調はそんなに悪くはないですよ。これから悪いところが出るかもしれないけれどね。

駅の近くに東練兵場があつたのね。今は団地が建つています。その練兵場の防空壕に人が大勢入つていたんです。私も家が焼かれ、行く所もないのでそこに入つていたら、兵隊さんが練兵場に大きな穴をいくつも掘つています。じつと見ていたら、爆弾で死んだ人達を埋めています。男か女かだけを確かするだけでしたね。そこには二日位いましたかね。また、子供の名を狂つたように呼んでいるお父さんもいました。練兵場の山を叫びながら歩いていましたね。

顔の半分は黒く焼け、半分は火脹れのような人が大勢いましたね。似島とか宇品の方に軍医さんがおつて、治療してくれたらしいけど、アカチンだけだったらしいですよ。私も宇品へ行ききましたよ。ちょっと痛かったので診てもらったら、傷口にうじがわいているんですよ。蠅が傷口をつついて、卵を産みつけたのね。大勢の人が死んでいきました。今こうして生きているのが不思議な位です。

それから、妹が田舎の五日市の方へ何か貰いに行こうと言うから、二人で行ったんです。そこではね、「水を飲ませて下さい」とは言っても「ごはんを下さい」「うどんを下さい」とは言えないのよね。乞食みたいにね。どこの家でも親戚が疎開に来ていてるでしょ。妹がおなかをすかせて泣きながら、「ごはんを下さい」と言えど、私に言うんですよ。何日もごはんを食べていないから無理もないけどね。貰えたのは生のカボチャでした。随分ひもじかったですよ。でも、時にはいい人に巡り会ってね。テントの中に入れてくれたり、焼き米をくれたり、助かりましたよ。そこには二日位厄介になりました。

そうこうして、どこかで天皇陛下の玉音を聴いたのね。天皇陛下が、なんか「焼けても、山あり川あり」とかラジオで言ってるね。負けて何が山あり川ありかと思っただけね。

そのころはね、お金が一銭もないんですよ。だけど、手提げ金庫がたくさん転がっていてね。石で壊して開けてみたんです

よ。そしたら、焼け焦げたお札が入ってましたね。その頃はお金がなくても汽車はただで乗れたらしいですよ。

そのうちに、アパートにいた友達に会ったんです。ちょうどテントを持っていたから一晩泊めてもらいました。

福屋デパートは町の中心にあつて、そこに行ったらみんな裸で真つ黒焦げでね。デパートの前にある電車の線路に死体がありましたよ。駆けている姿勢のようでしたよ。建物疎開といって建物を壊す作業に来た学生でした。年は十五、六でね。爆弾が落ちて逃げて行く時の格好ですよ。きつと逃げて行く時に火に包まれたのでしょうか。女子学生か男の学生か分かりません。黒焦げで裸のようになっていましたからね。黒焦げでも、内臓は焼けてないそうですよ。それを放っておくと変な病気が流行るといふことで、兵隊さんが来てね、木切れを集めては死体を焼いていましたよ。

六〇年間は草も生えないと言われていましたね、広島は。郡部の方から田舎の人が死体処理を手伝いに来たそうです。その時ガスを吸って、それが原因で後に大勢の人が死んでしまったそうですよ。

五、六年前に広島に行ったとき、セメント井戸から石ころみたいのが出て来たといつてね。人骨ということだったですよ。当時被曝した人達が熱くてたまらずに、井戸に飛び込んだという事でした。まだこういう古井戸には人骨が相当あるという

話ですよ。防火用水槽にも大勢飛び込んで死んだようです。
私もその時はルンペンみたいでしたけど、広島駅の方には
戦災孤児がたくさんいました。大きい軍服を着たりしてね。子
供達は疎開から帰ってきたら、親は死んでしまっただけ。今はだ
いぶの年でしょう。時々どうしているかなと思ったりしますよ。
だからもう戦争はいやですね。勝つといってもいやですね。

